

後藤流「一気留滞説」と一元流をつなぐ身体観

木村辰典著

■・はじめに

後藤流に関する書籍を読んでいると、一元流とどこか繋がりを感じるようになりました。

それも治療の枝葉ではなく、幹となる部分でそう感じるのです。

後藤流の「一気留滞説」を考察することで、その理由に少しでも迫ることができればと思います。

■1. 後藤良山(1651～1725年)について

曲直瀬道三（1507～1594年）以後、李朱医学が主流だった江戸時代の中頃に、良山は現行の医学に疑問を持ち、『黄帝内経』や『傷寒論』など古法を重視する医学を実践した人物です。

幼少の頃から儒学や医学に触れて聡明な子供でしたが、江戸暮らしで、10年で7回も火災に見舞われ、家族がすべての財を失います。失意の中、故郷で穏やかな老後を迎えたいという父の意向を受け、京都へ移住しました。

良山は逆境の中、自分が何を目指すかを考え抜いた末、医学で身を立てることを決意します。

当時、京都で古医法を唱え高名であった名古屋玄医（1628～1696年）に入門を願い出るも、謝金が薄いことを理由に断られてしまいました。

これに奮起した良山は、その後、伊藤仁斎（1627～1705年）の古学の影響も受けながら独学で医学研究を深めていきました。

『傷寒論』の治療だけに拘らず、養生として肉食、温泉を奨励し、お灸も多用する治療スタイルは、高価な薬が手に入らない庶民にも幅広く受け入れられました。

その治療の根幹を為（な）した「一気留滞説」とは、どのようなものだったのでしょうか。

■2—1. 一氣留滯説:「一氣」とは

「一氣留滯説」は、吉益東洞（1702～1773年）の「万病一毒説」と合わせて江戸時代以後、日本漢方に大きな影響を与えました。

その内容を、要約すると次のようになります。

「百病の原因は一氣の留滯にあるため、これをめぐらせると病は治る」

外邪であれ内傷であれ、氣滯をめぐらせると病氣は治ると。実際に治療している人からすると、にわかには信じがたいような気もします。

ここで気になるのが「一氣」という言葉です。良山の弟子が著したとされる『師説筆記』には、次のように書かれています。

「およそ病の生じる風・寒・湿によれば、その氣滯り、飲食によるも滯るなり。七情によるも滯るなり。皆、元氣の鬱滯するよりなるなり。故に、そのささゆるものは大概、このように違えども、その相手になり滯るところは一元氣なり。・・・(略)」

良山は、百病の原因は「元氣の鬱滯」だと言いつけているわけです。

その中でも、病の原因について、十のうち七八は腹中の沈寒痼冷を挙げています。

そして、これをめぐらすべきだとも主張していることから、ここに、肚（はら）を中心とした身体観を見出すことができます。

■2-2. 一氣留滯説:「元氣」とは

『日本医学史』の富士川游によると、艮山の言う元氣は、李朱医学のそれとは異なることを指摘しています。

「一身の中、四肢百骸その気の運び憑かずとういことなし。分けて之を言うとき、陰陽、水火、氣血、營衛、合わせて之を言うとき、すなわち一元氣となる」

「身中身外、蓋しこれ氣である、天地相貫き、少しの間隙もない」

「腎間に寓するものもまた、氣中の一氣なるのみ。・・・(略)」

という艮山の言葉を以て、両腎の間のみを指す元氣とは同じではなく、艮山の元氣は身体の中に充満している氣を指していると指摘しています。

頭が混乱しそうですが、これは場の設定の問題なのでしょう。

艮山は、天地（大宇宙）と人体（小宇宙）を比較して、天地に充満する氣と人体に充満する氣は、天地という一括りの場、人体という一括りの場において違うところはない、そう言っています。

ですから、腎間に寓するものも、これも元氣だと言っています。

李朱医学の「元氣」も包含する「元氣」ということだと思えます。

■2-3. 一氣留滯説:氣一元の観点

艮山の次男で、その医術を継承した後藤椿庵（1696～1738年）が著した『帳中遺稿』では、次のように語っています。

「古今、陰陽を論ずる者、大要、水火男女血氣營衛を分別してその対峙を言うに過ぎざるのみ。それ天地の中、空洞物無く、ただ一氣のその間に鼓舞動発する有り。陰陽はそれ氣、氣はそれ陰陽。万化これよりして生じ、品目これによって成る。須らく対峙自ら流行の中にありて、流行の外、また対峙有るに非ざるを知るべし。・・・(略)」

これを読んだ時に、きっと艮山も氣一元の生命観を有していると確信できました。

陰陽などの対立（対比）は流行の中にある、一括りの人間の中で陰陽という物差しを使いましょう、と言っています。

■3-1. 艮山の治療法:順気

次に、その鬱滞を順気させることが治療の眼目と言っているわけですが、そんなことをしたら、患者さんが余計にしんどくならないのかな、という疑問が湧きます。

なぜなら僕たちは、この元気の鬱滞の裏には元気（生命力）の虚があることを学んでいるからです。

ひょっとすると艮山は、それを見落としていたのでしょうか。

順気を用いることについて、次のように述べています。

「順気の剤を立てる意は、諸病多く積塊より生じ、気の順行せざる方より生ず。故に順気剤に加味して用いることなり。

畢竟、順気剤は胸脇腸胃の間をくつろげるなり。」

元気の鬱滞によりできた積気が、腹中の気の動きを制限しているので、これをめぐらせる。そうすることで、気の昇降出入が滞りなく行われ、呼吸状態や飲食の吸収、排せつもよくなると考えたようです。

艮山は、虚乏の患者に対して、自然の大補としての食事、中でも肉食に重きを置いていました。後天の元気を補うためにまず順気させ、脾胃の状態をよくし、消化吸收しやすくさせようとしていたと考えられます。

当時の医師の多くが、虚乏の患者に、食事よりも補益の服薬を優先し、反って悪化させてしまうことが多いことを嘆いていることから、食べたものをしっかりと吸収することができなければ、元気を補うことはできないという、艮山の信念が伺えるところです。

■3-2. 艮山の治療法:灸法

後藤流は「灸家」と呼ばれるほど、お灸を多用しています。

宮川浩也先生が指摘されていますが、それまで主流だった大きな艾を改め、小艾多壯を取り入れたのが大きな特徴です。

先にも挙げた、腹中の積気の要因である沈寒痼冷には、お灸が最も効果的であると考えていたようです。

背部兪穴に施灸するときは、常に陥没しているところを求め、数百壯を超えることもありました。

これらはすべて、灸熱を腹の沈寒痼冷にまで徹するためだったのです。

また、艮山の灸は、太陽活壯の灸とも呼ばれており、背部の太陽経に多壯灸を据えることで、腹の積気を動かし、元気がめぐることによって衛気も強くなって、外邪にも侵されにくくなるお灸だったことが伺えます。

後藤流灸法で、僕が大好きなものがあります。

それは、灸を据えた後の過ごし方の指導です。

息子の椿庵の著書には『艾灸通説』という灸法の専門書があり、次のような一文があります。

「灸の終わりに、大嶽を望遠させる・・・(略)」

お灸を据えた後は、大きな山を遠くに望む。

実際に試してすぐに気づきましたが、遠くの大きな山は凝視できません。

施灸後は目や頭をぼーっとさせることが大切だということでしょう。鬱気を開暢するためとのことですが、スマホを手離せない現代人には、より必要な言葉だと思い、患者さんにも積極的に伝えています。

■4. 艮山の養生

気一元の身体観にて治療に当たる時は、生命力と症状は常に一体。病むこともまた、生命力の表情の一面であるならば、そうならないような、身体の使い方、過ごし方に考えが至るはずです。

『師説筆記』にはしっかりと書いてありました。

「未病を養生するようにとくが我が門のたてなり。療治は第二段なり。・・・(略)」

どの流派であっても、誠実に生きた身体を観ていくと、ここに辿り着きます。

養生については、肉を食べること、お灸、温泉などを勧めています。

■ 5. まとめ

後藤流の「一気留滞説」とは、病とは、元気の滞りが原因であるため、順気剤やお灸にて滞りをめぐらせて、腹内の気の昇降出入を助け、食事の吸収をはかることで元気を補い、元気の滞りが起きないようにしていく治療法。

後藤流と一元流は、気一元の身体観を有し、養生を第一とすることに共通点を見出せました。

後藤流は元気の滞りにのみ着目しているように見えますが、背部俞穴は陥凹しているところを取穴するようにしているところなど、気虚が伺える経穴にお灸を据えて元気を補っているようにも考えられます。

このあたりは、まだ結論は出ませんので、今後も研究していきたいと思います。

いずれにしても、気一元の身体観をもって元気の流れを観察していけば、目指すところは同じ、元気（生命力）の偏在を調べ、充実させることになるのではないのでしょうか。

以上

■ 参考文献

- ・『師説筆記』著者不明
- ・『艾灸通説』後藤椿庵著
- ・『日本医学史』富士川游著
- ・『鍼灸医学典籍大系』第十七巻「五極灸法」佐久間洋行 解題
- ・『鍼灸 OSAKA 』Vol.29 No.3
- ・『一元流鍼灸術の門』伴尚志著